
大魔術師と助手

沢風 炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大魔術師と助手

【Nコード】

N0876Y

【作者名】

沢風 炯

【あらすじ】

大陸の中心を統べるクライスト帝国。弓術師で賞金稼ぎ、男と間違えられること多々ありのファイイは、ふいに安定した高収入を求めて城の大魔術師助手の面接を受ける事に。

さくつと面接に受かったものの、その大魔術師アシュリーに会ってみれば「要らない」と言われる始末。負ければ即・クビの御前試合でなんとか残り、正式に助手（何故か兼護衛）となったものの、一向に「要らない」と言われ放置されるのは変わらず・・・。

そんなアシュリーに勝手についていく彼女と、彼女を面白がって

応援する城の住人達。徐々に距離の近づいて行くアシュリーとファイの物語。

プロローグ

孤島の王国があつた。

大昔には誰も知らなかった王国。

外界となんの接触もなく時を過ごしたその国は

何時でも花が咲き乱れており、とても美しく、平和で、穏やかな国だった。

治めるのは代々女王。

優雅で美しく、聡明で、誰からも好かれていた。

??時代が移り変わり

やがて一隻の船がこの孤島を見つけると、瞬く間に外界との交流が始まった。

文化、物資、様々なものが行き来し

いつしか王国に、外界の血が混じるようになっていった。

それは、王家にも言える事。

しかしその頃から、王国の花々は枯れていった。

憂えた誰もが親身になって世話をしても

それを拒絶するかのようになり、花は枯れていった。

そして、花が枯れるにつれ、孤島を囲む海が荒れていった。

徐々に外界は孤島に近付くのを止め、遂には誰も近寄らなくなつた。

海は荒れ、花は枯れ、人も病に倒れるものが多くなっていった。

それでも、王家だけは病に倒れなかった。
けれどもいつも悲しみが付き纏い、次第に莊嚴そうごんな城から出る事は無くなった。

失意の底で、女王は祈る。

どうかこの海が静まるよう。

どうかこの花々が咲き乱れるよう。

どうか病が無くなるよう。

どうか、どうか??

この王国が、かつての美しい姿を取り戻すよう。

そして??

願わくば、哀れな私の娘が、愛するあの方と共にいれるよう。

その晩、女王は眠りについた。

眠りは夢を誘い、彼女を虜にする。

咲き乱れる花々。楽しそうな人々。静かに波打つ海。
あの方と幸せそうにする娘。

全てが望むもの。
全てが懂れるもの。

そんな夢を毎晩見るようになっていた。
そんな夢にずっといたいと思う様になっていた。
それが現実ならいいのにと願うようになっていた。

ある朝、姿を見せない母を不思議に思った王女は、そっと母の寝室を覗いた。

眠っている母の顔を見て、王女は少し微笑んだ。

その顔が、あまりに幸せそうに満ち足りていたから。

しかし、そっと頬を撫でて凍り付いた。

女王はもう、冷たくなっていた。
それなのにどうだろう。

その肌は柔らかく、まるで生きているかのよう。
鼓動も止まり、息もしていない。

それなのに、女王は眠っているようにみえる。

その肌は、冷たく。

しかし、生きてはいない。

いつの間にか、母の周りには、失われた花々が芽吹き始めていた。

時は流れ??

ここはクライスト帝国。

大陸の中心を統べる大国であり、その中心である王族、軍人のみならず国民さえもが国を考え、国を作っている。

絶対的な信頼でこの国は成り立っていた。

その帝国一のギルドで今、運命の歯車が廻り始める??。

「高収入? そんなのいくらでもあるだろうが。ほれ、こいつなんか生け捕りにしたらかなりの大金だぞ?」

そう言ってギルドの男が指名手配書をひらひらと振る。

それをうっとおしそうに見やり、言葉を続けた。

「そうじゃなくて、持続出来るものないか?」

ギルドの男はぴくりと眉を跳ね上げ、訊ねた相手を睨んだ。

「だったら城にでも行け! ここは安定職の仲介所じゃねえ。」

「じゃあ城関連のないのかよ。」

「城に行きゃあ分かる事だろうが!」

はあ、と相手は大仰に溜め息を吐く。わざとらしく落胆して見せるのだ。

「帝国一のギルドだっていうから、期待してきたのに残念だな。結局他廻るしかないのか。無駄足だったな。」

相手はまだ二十歳前後だろう。細身の体は鍛えてありそうだが、別段熟練した風でもない。そんな青二才に馬鹿にされるわけにはいかなかった。

「無駄足だと!？」

「だってないんだろ? 城の仕事は城に行かなきゃ分かんないんだろ? なら無駄足じゃねーか。」

「おい: ナメた事言ってるじゃねえぞ。」

そう言うのと、ギルドの男は何かを思い出したようで、忙しくリストをめくると、一枚の紙を嫌味な笑顔とともに突き出してきた。

「月収200万イルだ! 文句ねえだろうが!」

返事はせず、相手は紙をひったくると内容を確認し始めた。

「……大魔術師の助手? 該当者も内容も、全部わかんねえじゃねえかよ!」

「面接で話すって書いてあんだろうが? どうすんだ。」

「……仕方ねーな。受理しろ。」

「偉そうに言うんじゃねえよ!」

ギルドの男は荒々しく書類に判を押し、相手に押し付ける様にして渡した。こんな生意気なガキの相手などしていたくはない。

「さっさと失せやがれ!」

そう怒鳴ったものの、身体に触れて違和感を感じた。男の顔色が変わると、相手は舌打ちとともに紙を奪い取り、一步離れてから不遜に笑う。

「礼は言っというてやるよ。」

捨て台詞とともにさっさと出口へ向かう。

男は何も言えないまま、扉が閉まるのを見ていた。

クライストの城では、一つの魔法陣の前で思い悩む女性がいた。
名はニルヴァ？ナ。
呼び名はニル。

儚気だが芯の強そうな瞳は赤みを帯びた紫。端麗な容姿を飾る真っ直ぐで長い髪は艶めく銀色。少し突き放した物言いをするが、困っている者を放っておけない性格から、男女から好かれる大魔術師だ。

「さて：なんて説得しようかしら：」
今も放って置けない事態をなんとかしようと、思い悩んでいる。
すると廊下から声をかけられた。

「ニルヴァ？ナ様！いらっしゃいますでしょうか？」
兵士だろう。

ニルは魔法陣を諦め、扉を開けた。

「なに？」

「はっ！ギルドから、助手の希望者が来ております！」

「助手：？ああ、あれね！どこにいるの？」

「はっ！検問室で待機しております！」

「そう、ありがとう。」

それだけ言ってニルは歩き出す。兵士は数秒見送っていた。

「ニルヴァ？ナ様：お綺麗だ：！」

検問室に入ると、すぐに希望者が目に入った。厚手のマントを羽織り、緊張した様子もなく椅子に座っている。その様に、思わず笑ってしまった。すると希望者がこちらを見て立ち上がった。

「私は大魔術師のニルヴァ？ナよ。」

「…弓術士のフィフィです。助手を探してるのは貴方ですか？」

「……貴方、女性？」

「はい。よく間違えられますが、女です。」

ニルはまじまじとフィフィを見てしまった。

薄茶の髪は肩につくかつかないくらいで、背も女性にしては高め、男性にしては低めといったところ。顔立ちも中性的で、男だと判断されるのは、少し低めの声と、落ち着いた、少し堂々とした態度からだろう。

「…男名を下さると便利なのですが。」

その台詞に、今度は嘖き出してしまった。

「面白い人ね！さ、座って。話をするわ。」

言われてフィフィが腰を下ろすと、ニルは少し楽しそうに話しかけた。

「ここへ来る前は何を？」

「ギルドで色々。主に賞金稼ぎです。」

「そう。こういう仕事は？」

「した事はありません。」

「魔術に興味があるの？」

「いえ、特には…」

「家事は出来る？」

「……？ ……はあ、一通りは……。自分が生活出来る程度には出来ますが……」

「そう。男は嫌い？」

「……？ ……特には……」

「他国には行ってみたいと思う？」

「……？ ……まあ、多少は……」

「面倒見はいい？」

「……？ ……面倒見た事ないのでなんとも……」

「そう。素直なのね。」

「……そうですか？」

ニルは何やら頷くと、にっこりとフィフィに微笑んだ。

「では試用期間を設けましょう。3週間頑張ってみて。」

そう言ってニルは席を立つ。すると、フィフィが慌てて呼びかけ
てきた。

「え！？ ちょっ……今ので終わり？」

「あら、終わり。充分よ？」

「いやいやいや、仕事内容は？」

「ああ……本人に聞いて頂戴。」

「ん……？」

フィフィはまじまじとニルを見た。

「貴方の助手じゃないんですか……？」

「あら……私の助手じゃないわよ？ 私にはもういるもの。助手が必要なのはもう一人の方なの。あ、これ書類ね。持って行って。」

「もう一人…?」

そうそう、とニルはフィフィに頷く。

「あ、あと男名ね。フィアニスと名乗ってもいいわ。好きな様に使
つて。ただし王家の方々には女名でね。」

「もう一人って?」

フィフィは今にも去りそうなニルに懸命に言葉を投げる。対して
ニルはにっこりと笑って言った。

「部屋の外にいる兵士が案内するから、ついて行きなさい。じゃあ
ね。」

そう言つてニルが手を振つて部屋を出ると、入れ替わりに兵士が
入ってきた。

「ご案内致します、フィアニス様!」

「……………」

置いて行かれたフィフィは、仕方なしに少々疲れた思考を切り替
えた。

(もう男の設定でいいんだな?)

取りあえず面接は通ったようだ。

今からその大魔術師の元へ案内してくれるようだし、それなら言
われた通り、本人に色々訊くのが得策だろう。

そう考えて、フィフィは兵士に向き直つて頷いた。

「頼む。」

取りあえずは、ついていく他ないだろう。

城の長い廊下を淡々と歩く。

無機質なところもあり、中庭に面した暖かいところもあり、長くいたらおかしくなりそうだと、フィフィは兵士に視線を移した。

「あ…俺がつく大魔術師ってどんな人？」

あたし、と言いかけて慌てて直す。兵士は気付いた様子もなくフィフィの話に答えた。

「アシュリー様ですね！あの方は、大陸屈指の大魔術師です！！」

「ふーん。で、性格は？」

得意げな様子をさらりと流し、フィフィは気になるところを訊いてみた。

しかし兵士は、途端に勢いを失う。

「性格は…」

嫌な予感がする。

「なに？」

「…いえ……そうですね…非常に関心が薄いといえますか…」

「何に。」

「その…色々なものに……」

何と言ったらいいいのか、と兵士は考え始めてしまった。

（とんでもないナルシストじゃねーよな……？）

不安に思っただけ聞いてみる。

「自分にしか興味がないとか？」

「いえ！そのような事はございません！」

即答だ。

「ならその曖昧な言い方はどっから来るんだよ。」

「はあ…申し訳ございません…何分色々難しい方です…」

「難しいって…頑固親父かよ。」

「いえいえ！あの方はまだお若いですよ。フィアニス様と同じ年頃ではないかと。」

「んじゃ気難しいんだな。」

「気難しい…そうですね…そういうところもお持ちですね…」

「はつきりしねーなあ。」

「はあ…申し訳ございません…」

すまなそうにする兵士を一瞥し、フィフィは話を止めた。一体どんな人物なのか、非常に不安がある。

（いくら城の人間だって言っても、変人だったらさっさととんずらするか。安定収入は諦めるしかねえな。）

そんな事を思っていると、目的の場所についたようだ。

兵士が廊下の端へ避け、姿勢正しく直立していた。

「こちらがアシュリー様の回廊になっております！」

「へー。」

兵士が指し示した方を見て、フィフィは戸惑った。そして、先程の兵士の台詞を思い出す。

「…ん？…回廊？」

「はい！大魔術師様お二人には、皇帝陛下より、回廊が与えられております！そして、こちらがアシュリー様の回廊になります！」

「……………は？」

フィフィはもう一度その“回廊”を見る。廊下から続く扉を少し開けると、中にはまだ通路が続いており、今まで歩いてきた廊下から少し外を覗くと、その“回廊”とやらがL字型にまだ続いているのが容易に分かった。

「……で？案内はここまでってか？」

若干威圧的なフィフィの言葉に少し気圧されつつも、兵士ははっきりとした口調で答えた。

「は、はい！お二人の回廊には、それぞれに属する者しか立ち入る事を許されておりません！」

「あたゝ俺も属してねえだろ！？」

「はっ！ニルヴァ？ナ様に渡された書類をお持ちですから、危険はありません！」

「危険ってなんだよ！」

物騒な言葉に慌てて食い付くと、兵士はそれを聞かなかった事にして続けた。

「ともかく、お進み下さい！私はニルヴァ？ナ様より、ここまでの案内を任されております故、これにて失礼させて頂きます！」

言うだけ言って兵士はくると踵を返し、逃げるように離れて行く。

「おいお前！」

怒鳴るように呼ばれて兵士はさっと振り返り、敬礼した。

「御武運を！」

「はいっ？」

そのまま急ぎ足で逃げて行ってしまった。

「っ……………」

脱力してそれを見送る形となったフィフィは、ニルヴァ？ナから手渡された書類をまじまじと見つめた。

（ほんつとにコレがあれば大丈夫なんだろうな……………見ても分かん

ねえ。」

書類と睨み合う事、数分。

（行くしかねえ！）

ぐっと拳を握りしめ、ファイファイは回廊の扉を開けた。

ギイイ???、と嫌な音がする。

（うわっ、幽霊でも棲んでそうだな！）

若干ビビってしまう。だが、顔も見ずに帰るわけにいかない。

それに上手く行けば安定した高収入が待っているのだ。

「アシュリー様！！ギルドから、助手として来ました、ファイアニスです！！」

これでもかという程の大声でアシュリーなる人物を呼ぶ。

こんな広そうな回廊、隅々まで探す気は毛頭ない。大体、あまり人は入れないようだから、これだけ騒げばきっと出てくるだろう。

「アシュリー様ー！！」

肝を据えて、出来るだけ大股で歩いていく。

「アシュリー様ー！！助手のファイアニスです！！」

何度も叫んで自分でも煩いと思い始めた頃、通路に並んでいる扉の中に、少し大きなものを見つけた。

「……………」

明らかに他とは違う。というよりは、石の壁に扉のように切り込みが入っていて、中央に光る石が埋めてあった。

（怪しいよなあ…。ここにいんのか？）

じつくりと観察し、その割りにはあまり考えずに、その石に手を当ててみる。

（……………）

「何も……っ!？」

何も起こらないと思った矢先、石は眩しく瞬き、扉がすうっと消え去った。

その先は、真っ暗で何も見えない。

「……………へえ……………すげえ……………」

しげしげと消えた所を観察し、そっと足を踏み入れた。

真っ暗だったそこは、フィフィが踏み入れた瞬間、左右の壁に次々と火が灯っていき、下へ続く階段をはっきりと見せた。

「…………アシュリー様ー!？」

階段の奥へと叫ぶ。しばらく待つと、微かに何か音がした。

(…変な実験とかしてて突然化け物とか出てきたらどうしようかな…)

なんて事を思いつつ、ゆっくりと警戒しながら石段を降りてゆく。

「アシュリー様ー? いますかー?」

声のポリュームを落とし、慎重に足を進める。

「アシュリー様ー?」

階段は長いようで短く、簡単に突き当たりへ行き着いてしまった。目の前には、木製の扉。

(…これ…開けるんだよね?)

不安を抱えながらも、この向こうに何かいる、という確信があった。

(よしっ!)

意を決して、扉を押した。

こちらは、回廊の入り口の扉が嘘に思える程軽く、滑らかに動いた。

それに感心しつつもフィフィは中を伺い見た。

「…アシュリー様ー?」

部屋は薄暗かったが、かろうじて部屋の様子は分かった。

どうやらいくつか大きな本棚があり、本は床に散らかっているようだ。中央には大きな机があるのが分かった。

（ようするに散らかしっ放しなんだな、アシュリーとやらは。）

「……う……」

（!?!）

部屋の中央からうめき声が聞こえた気がした。人の気配もする。お目当ての人物かと思い、そうっと無造作に散らばる本を避けつつ机によると、誰かが机に突っ伏しているようだった。

（ん……?）

その“誰か”の耳元が、弱々しく光っている。

興味を惹かれて覗き込んでみると、耳飾りの宝石が、僅かに光を放っているようだった。

（すげえ……光る石なんてあるんだな……）

その幻想的な光景を思わず観察してしまう。その視線に気付いたかのように、光がこちらを“見た”気がした。

（んっ!?!）

まさか、と思った瞬間だった。

「!?!」

耳飾りの宝石から眩いばかりの光りが飛び出したかと思うと、凄い早さでフィフィの周りを飛び出したのだ。

「なっ……!?!」

とっさに逃げようとするが動きが早過ぎて進路が見えない。光はフィフィの眼前を眩しい光で埋め尽くす。

おまけに鈴を振るような音が、どんどん大きくなっていて、ひどい耳鳴りがしてきた。

（眩し……それに、耳が……!?!）

眩しさのあまり視界を奪われ、耳を塞ぐ為に身体を動かせば、そ

れにすら耐えられず、バランスを崩した。

まばゆい光。

ひどい耳鳴り。

フィフィは完全に目を閉じ、耳を塞ぎ、その場にしゃがみ込んで動けなくなった。

その時、積み上げられた本の山を崩してしまったのだが、フィフィはまったく気付けない。だが机に突っ伏していた人物は、その大きな音で目を覚ました。

（!?!?人?）

「ウェスperl止めろ!」

明らかに侵入者を威嚇している使い魔に命令を下すと、光は一瞬驚いて固まり、ちらりとふてくされたようにして耳飾りの宝石に戻った。

「ああ、ありがとうな。お陰で安心して寝れたよ。」

そう言って機嫌をとると、嬉しそうに、可愛らしい鈴の音で答えた。光りも大人しくなっている。

そして、部屋の灯りが瞬時に灯った。

（で、この人は…?）

侵入者と言えど、城からなんらかの許可が出ている筈だ。でなければこの回廊へ入る事すら出来ないのだから。

しかしウェスperlの事を知らないとなると、王家からの許可を受けた者ではないだろう。

つまり“賓客”ではない。

（可哀相に。もろにウェスperlの攻撃を受けてとなると、ニルの仕業か…?）

1021 (後書き)

ご意見、ご感想をいただけると舞い上がります

話しかけても今は音が聞こえないだろう。

そう思っ、そつと瞼を手で覆う。

一瞬びくりとしたが、眩しさを軽減出来る事に安心したのだろう。
しばらくそのまま大人しくしていた。

そして、そつと手を外してやると、ゆっくりと瞼を上げた。

(……なんか：ぼんやりしててよく見えねえな。)

目の前に誰かいるのは分かる。先程机に突っ伏していた人物だろうか。

それと、部屋の灯りがついていて。

(あ、見えてきた：)

だんだんと目に映る風景が鮮明に見えてくる。
すると、目の前にいる人物が男だと分かった。

若い。歳は同じくらいか、もしかすると下かも知れない。

明るい灰色の髪は肩くらいで、首の後ろで一つに纏めているものの、纏めきれない髪が両頬にかかっている。瞳は深い群青色だった。
顔立ちは若干幼く見える。

その人物は、瞼からどけた手を、耳を塞いでいるフィフィの手に重ねてきた。

その行動に戸惑ったが、任せた方がいい気がした。

しばらくそのままで、やがてそつと手を離す。つられるようにフィフィも耳から手を離した。

「……聞……る？」

聴覚もやられていたらしい。フィフィが困った様に眉根を寄せる

と、その人物は大きな声で話した。そうすると丁度よく聞こえる。

「しばらくすれば戻るから。」

聞こえた言葉によくよく頷いた。それを確認すると、その人物は立ち上がり、奥の扉へ向かった。

（まだ奥があったのか：あいつがアシュリー様か？わっかいなあ：さっきのニルヴァ？ナ様も若かったけど：）

そんな事を思っていると、アシュリーと思われる人物が戻ってきた。手にはポットとカップだ。足音がさっきよりも鮮明に聞こえた。（耳も戻ってきたかな：）
そう思い、ゆっくりと立ち上がってみた。よろめく事もなかったのでもう大丈夫だと思われる。

試しに口を開くと、しっかりと自分の声が聞こえた。

「アシュリー様ですか？」

そう声をかけると、アシュリーと思われる人物は一瞬フィィィを見て固まり、続いて何も聞こえなかったかのように椅子を勧めてきた。

「まあ座って。お茶煎れたから。」

「……………」

言った本人はすでに座ってカップに口をつけていた。

「失礼します。」

腰掛け、有り難くお茶を頂く。

「書類は？」

言われて一瞬なんの事かと思ったが、慌ててニルに渡された書類を差し出す。

アシュリーと思われる人物はそれを受け取って、書類をじっくり眺めた。

「……助手？」

書類を見たまま、訝し気にそう言う。フィィィはギルドで見た紹介状を思い出して頷いた。

「それで来た筈です。」

「…筈って…」

「で、アシユリー様ですか？」

そう言うのと、アシユリーと思われる人物はしばらく悩んだ。

（何悩んでんだよ。二者択一じゃねえか。）

大丈夫だろうか。ちょっと不安だ。

「俺がアシユリーだけど…」

（やっぱそうだな？何悩んでたんだ？）

そんな様子には気付かず、アシユリーは怪訝そうにフィフィを見た。

「なんだって、助手？」

「俺に聞かれても…そういう紹介だったんで。」

（なんで本人が分かんないんだ？）

「ニルヴァ？ナ様には、試用期間三ヶ月と言われました。」

「ニル…！」

驚いた次には、頭を抱えてしまった。ちょっと心配になってくる。

（もしかして助手って、頭のか？）

と、勝手に失礼な事を考える。すると、はっと顔を上げてフィフィを見た。慌てて姿勢を正す。

「…なんで希望したの？」

「…安定した高収入の為です。」

言われてアシユリーは慌てて書類を見直した。

「月給200万ソル」？

「…アシユリー様は御存知なかったんですか？」

「……………」

（冷や汗でてんど。大丈夫かあ？）

口を開けたままわなわなしているアシユリーを見て、フィフィは丁寧に頭を下げた。

「でもまあ取り合えず助手なんで。よろしく願います。」
ぺこり、と頭を下げる。アシユリーはそれを呆然と見ていた。が。

「……要らない。」

「は？」

まさかと思って聞き返すと、さっきとは打って変わって、驚愕する様子も戸惑いもなく、迷惑そうな顔をしていた。

（…なんだコイツ）

思わずぴくりと口の端が動く。

「助手は要らない。俺には必要ない。」

「…そう言われても。」

言い返すのだが、ずい、と書類を押し付けられる。

「ニルにそう言って。」

一方的なアシユリーを無視して、フィフィは拒む。

「困ります。書類にはもう契約済みになってるじゃないですか。」

「でも要らないんだ。帰って。」

「帰りません。せめて三ヶ月は。」

睨み合う事しばし。アシユリーは何かに気付いて押し付けていた手を引っ込め、青ざめた。

「き、君…！」

（あ、そう言えばそうだった…。）

失念していた自分を少し恥じる。だが、済んでしまった事態は仕方がない。それよりもこの仕事を白紙にされては困る。

「なんと言われても帰りません。書類上では契約は済んでるし、せめて三ヶ月の試用期間は認めて下さい。」

フィフィが女である事に気付き一瞬怯んだアシユリーだったが、直ぐに体勢を立て直した。

「……ニルと話してくる。」

そう言って出入り口へ向かってしまう。

「ちょっと！俺はどうすれば？」

「そこに座ってて。」

思い切り睨みつけられた様な気がするののは気のせいだろうか。

「あつ」

さつと書類をかすめ取って、奪えないように上へ掲げる。

「書類は預かります。話し合いに必要ないでしょ？」

「……………」

（このやろう、ってか？思ってる事顔にでてんぞ、アシュリー様。怖かねえけどな。）

「ね？」

にっこり笑ってやると、アシュリーは一瞬目を丸くした。が、ちやっかり書類を奪還したかと思うとぽつと身を翻して部屋を出て行った。

（……………なんか、ガキみてえ。）

小さな子供が急ぎ足で駆けて行く。周りの大人達は微笑んで、いつも通り道を開けてやる。

子供は大魔術師の回廊へやってくると躊躇い無くその扉を開き、入る。そのままの軽い足取りで奥へと進み、絵が沢山飾られた部屋へ入ると、目当ての絵を見つけて駆け寄り話しかけた。

「“しるべ”よ。主のもとへしもべをいざなえ。」

すると絵の人物は子供に手を差し伸べる。子供は素直に手を差し出し、絵は子供の手を取り、回廊の主の元へと誘った。

「ニルさま！」

幼い声が主を呼ぶと、ニルは愛おしそうに声の主を迎えた。

「お帰り、ユンファ。」

「ただいまもどりました！」

ユンファと呼ばれた子供が駆け寄れば、ニルは優しく抱きとめた。
「あの、アスさまが来るみたいです。」

困った顔でユンファが言うのと、ニルは笑った。

「やっぱりね。あの男の事だから、絶対文句言いにくと思ったわ。」

そう。予期していた事なのだ。

気難しくて面倒くさがりの彼の事だ。助手なんて要らないと、それはもう不機嫌な顔をしてやってくるだろう。

「ニル！」

ほら。

噂をすればなんとやらだ。ユンファがさっとニルの後ろへ隠れた。

「あら、なあに？すごい顔ね。」

ニルは笑いを堪えながらぬけぬけと聞いた。

「なにじゃない。これはどういう事？」

転移方陣から現れたアシュリーは、予想に違わず思い切り不機嫌な顔をしていて、ニルは大笑いしそうになるのを堪えた。

差し出された書類の内容を分かっているながら見直してみる。

「…貴方の助手の契約書よね。これがどうかした？」

「どうかしたじゃない。なんで勝手にギルドに依頼なんかするんだ。」

「今更どんな文句言ったって無駄よ？もう契約済みなんだから。」

「俺は同意してない！」

ぐっと拳を握りしめてアシュリーは怒鳴った。ニルは慣れたものだ。

「忙しそうだから気を使ってあげたんじゃない。それに助手でもいなくちゃ、貴方の回廊って足の踏み場もないじゃないの。」

「気を使っただって？有り難迷惑って言葉知ってる？それに君は転移方陣で来るんだからあんなところは通らないだろ？」

「貴方に用があるのは私だけじゃないでしょう？それに貴方の部屋きたら、キノコでも生えそうよ。あれは衛生上良くないわ。」

「君が助手になるわけじゃないんだから関係ないだろ！」

「怒鳴るものじゃないわ。ユンが怖がってるじゃないの。」

わざと大きな溜め息を吐き、わざとユンファを優しく撫でる。それを見て予想通り少し勢いが落ちたものの、アシュリーはしつこく抗議する。

「とにかく助手は要らない。君の書術なんだから君が破棄させて。」
「もう契約成立なのよ。陛下も了承済みなのよねえ。破棄させるなら貴方が陛下に申告してくれない？ 貴方の助手の事なんだし。」

「俺は同意してない。なのに君が勝手にやったんだ。君が破棄させるのが当然だろ？」

「私が言ったところで陛下は本人を連れて来いとおっしゃる筈よ？ どうせ貴方も行く事になるの。」

「どうして俺が！ 悪いけど君が引き起こした事態に俺が付き合う義理はないだろ？ あの助手を連れてさっさと破棄してきて。」

強情なアシュリーらしい。これしきでは引き下がらないか…そう考えて、ニルは大仰に呆れてみせた。

「貴方って人は！ 可愛い女の子を路頭に迷わせるの？」

その台詞に、一瞬固まるアシュリー。

「な、し、知ってて…！？ …いや、そんなの関係ない！ とにかく俺には要らないんだから！」

「女の子がギルドで指名手配者を追うのは普通だって言うの？」

「そ、そんな事言っていないだろ？ 俺は」

「そうやって生きてきたんだから死ぬまでそうしろって言うつもり？」

「だからそうは言ってないだろ！」

「じゃあ助手くらい認めてあげなさいよ。」

「いや、だから…だったら君の助手にすればいいじゃないか。」

「私にはユンファっていう助手がいるもの、ねえ？」

にこりとユンファに微笑みかけると、心底嬉しそうに微笑み返してくれる。この無邪気な笑顔が、ニルには必要なのだ。そんなユンファを、アシュリーは複雑そうに見つめた。

「助手っていうより…」

「だからね、彼女は貴方の助手なの。ね？分かるでしょう？何も四六時中一緒にいるとは言わないわ。普段はあの回廊で、お互いに好きに過ごしていればいいのよ。ね？そして、仕事へ行く時は連れて行くだけでいいのよ。ね？これだけの事よ。」

「……………」

悩み始めたアシュリーに、決め手とばかりに笑んだ。

「それに彼女は弓術士よ。賞金稼ぎしていた期間も長いし、貴方の苦手な体術を補ってくれるわよ。もう不意打ちで情けない姿を晒さずに済むじゃない？」

「……………」

羞恥と怒りで言葉をなくすアシュリー。身体がぶるぶると震えている。

「ね？分かったら早く戻って契約書の書術を完成させないと、確実に陛下からお呼びがかかるわよ？」

「……………」

契約の書術は、一番最後の段階を残している。それを長く放っておくと、城の魔力に歪みが生じて守りに影響を及ぼしかねないのだ。悔しさも加わってニルを直視出来ないアシュリーは、やがて黙ったまま、足音荒くニルの部屋を後にした。

「……………」

「…ニルさまあ…」

「な、なあに？」

「……ユンファはこわかったんですけど…ニルさまはたのしかったんですか？」

「すごく!!」

言ったかと思うと、ニルは声を上げて笑い出した。

「あ、アシュリーったら、本当に、面白いわ…! あんな屁理屈で、一生懸命考えるんですもの…!」

しばらく不安げにニルを見ていたユンファだが、やがてつられて笑い出した。

「…ニルさまがたのしかったなら、ユンファもたのしいですっ!」

「いい子ね、ユン」

ぎゅっと抱きしめると、小さな手が懸命に抱き返してくる。その仕草が愛おしくて、ニルは切ないくらいに安らぎを感じていた。

「納得いかない!」

ばん、とアシュリーは机に八つ当たりをする。フィフィはそれを黙って見やる。

この大魔術師、戻ってきたと思ったら、もう三十分くらいはこうして考えては八つ当たり、を繰り返している。

最初は適当な所で諦めさせようと思っていたフィフィだが、アシユリーの行動がどうにも子供っぽく、呆れてしまった。

（これでも大魔術師だもんなあ。あんまり早く才能が認められたから甘やかされたんだろうな、きっと。）

勝手にそんな事を思って眺めている。

あくびをかみ殺し、部屋を眺める。

アシユリーをまた見る。

あくびをする。

部屋を眺める。

それにも飽きてくると、やる事はひとつだろう。

「……はあ……もうこうなったら、なんとか契約破棄の条件を満たすようにしないといけない。」

そうようやく決意して振り返ると。

（ん？）

穏やかな寝息をたてるフィフィの姿がそこにあった。いつの間にかウェスperlが、好奇心も露にフィフィの寝顔を覗き込んでいる。

「……………」

穏やかな光景だ。こうしてみると、さすがに女に見える気がする。

「……………」

（なんだってギルドなんか？）

大きな屋敷の奉公くらいは、大抵の娘ならやっているのに。

（そして、どうして助手なんか？）

本当に安定した高収入の為だけなのだろうか。怒りや不満をひと時忘れ、アシユリーは珍しい来訪者に思いを巡らせた。

くすくす、と笑い声が聞こえた。眠っていた自分に気づき、重い瞼を無理矢理開ける。

「……………ん」

（あれ？…ああ、ここ…城か。いくら敵がいなかったからって、熟睡し過ぎたな。）

んー、と思い切り伸びをして、部屋を見回す。部屋の灯りは灯ったままだ。

（…ほんと、本が多いな…本棚があるのに殆ど外に積んであるし…）
そう言えば、と思ってアシュリーを探す、あいにくこの部屋にはいないようだった。

（もう一つ部屋があるみたいだったよな…）
その扉を探す際、ふと気付く。

「あれ？」

（そういや、ここって地下だっけ。）

窓がないのだ。

（これじゃ時間がわかんねえな…ここへ来たのが昼間だったから…夕方か夜か…）

窓がないと分かっている、ついつい見回して探してしまう。だが、無いものは無いのだ。

フィフィは立ち上がって部屋の探索を始めた。主がいないのだから、暇な事この上ない。それに、仕事内容がはっきり分からないのだから、何もしようがない。

「どれどれ…」

まずは机の上を調べる。大きめの木の机だ。その上には灯りを灯す不思議な球体。ペンと、インク壺。元は立派な机なのだろうが、ここにも本が散乱していてアシュリーが突っ伏していた辺り、そしてフィフィが寝ていた辺りしか片付けられていない。

「……………」

そのままにしておく。

部屋は広く、天井はとても高く、そこへ伸びるように背の高い本棚が並んでいる。

（あんなに高い所にあって…あいつに本が取れるのか？）

考えてみて、軽く頷く。

（大魔術師なんだから、取れるか。）

取り合えず部屋中を見て回ろうと思い…本で身動きが取りづらい事この上ない。という事態に気付く。

「…………まあ、仮にも助手なんだし。片付けても文句言うなよ。」
「今まだいない主に言い捨て、フィフィは片付けを開始した。」

その頃、アシュリーは回廊を出て、城の廊下を考え事をしながら歩いていた。

（契約破棄の条件は…身元、仕事の態度、人格、これらに著しく問題がある場合…それから…王族の不満を買う…あとは…くそ、俺が面接すれば済んだじゃないか！！ニルのやつ…！！）

そんなアシュリーを人々は避けて歩く。中には物珍しげにみる者もいるが、それもその筈、アシュリーはあまり回廊から外に出ない。

それに加え、城に上がったのはわずか十歳の時。わざわざ王が隊を組んで迎えに行ったのだ。この国のみならず、他国でも噂となり、この世界でアシュリーを知らない者はいない。

そんなアシュリーだが、魔術を使う時以外は至って普通の若者であり、魔術以外の事には疎い。今も考え事に熱中している為、足下すらも見えていない。

この状況で真正面から来る人を避ける事は不可能だった。

「うっ…!?!」

顔から見事に激突し、ついでにぶつかった人物にがしっと抱きとめられた。

「なっ!?!?ぐ、苦しっ…」

「なにをやってるんだお前は。」

体躯の良い身体を無理矢理引き剥がし、アシュリーは慌てて顔を上げた。

「……なんだお前か…」

げんなりして言うと、相手は眉根を寄せて言い返す。

「なんだとはなんだ。友が悩んでいるようだったから声をかけてやったのに。」

「いつでも上から物を言うよなお前は。」

アシュリーの目の前にいるのは黒尽くめの男だった。長身の体に黒い服を纏い、黒いマントを羽織り、腰に下げた剣の鞘も黒ければ、髪も目も黒い。黒という色彩は近寄り難い雰囲気を作るものだが、加えてこの男は目つきが鋭く、自分が気に入った相手にしか口を開かない。ついでに言うと、無表情。近寄り難い事この上ない。

「リディ。突然、お前に助手をつけるって言われたらどうする？」
アシュリーがそう訊ねると、リディことリディオスは顎に指をあて、しばし考えた。

「…そうだな…追い返す。」
なんとも簡潔だ。

「じゃあオルクスあたりが勝手にお前と契約させてたら？」
オルクスというのはリディオスの親友で戦友で上司である。

「…………殴る。」

「俺の場合、それはニルだから出来ない。」

「なんだ。ニルヴァ？ナにそんな事をされたのか。」

「勝手にギルドに申請して、勝手に面接して、勝手に契約したんだよ！」

怒りに両手を握りしめ、力説するアシュリー。リディオスはそれを興味深そうに眺める。

「それで、助手を追い返したくて考えている訳か。」

「そうだよ！お前も考えてくれ！」

「殴り倒して放り出せばいいだろう。」

「…出来ない。」

「ああ、武術は駄目だったな。俺がやってやろうか。」

「いや！それは駄目だ！」

物騒な発言に慌てて止めに入る。

「…何故。」

「いや…その…………あっ！」

慌てた次は考え込み、何やら閃いたようだ。

「そうか……！その手があった！」

そのままアシュリーは走り去って行った。

「……………唐突だな…」

残されたりディオスは一人ぼやき、何事もなかったかのようにまた歩き出した。

1041 (後書き)

書術……文字に魔力を込める呪術。書いてあるものには出来ない。

魔力を込めて書かれた文字は”書かれた場所、もの”に効力を発揮する。

例えば壁に書かれればベニヤでも鉄のような強度をもたせたり、重要書類に書き加えれば特定の人物しか見れないようにしたり出来る。

片付け（とは言っても散乱していた本を、本棚に沿って積んだだけ）が終わったフィフィは地下の部屋にいるのも飽きて、ここへ来た時に降りてきた階段を、今度は上がる。

消えていた階段の灯りは、フィフィが一段目に足をかけると再び灯った。

「この仕組みすげーよなあ…」

昇りきり扉を開けると、背後で一瞬にして灯りが消えた。

「すげー…」

感動しつつも地下を出る。そして、来た時に見かけた通路の扉を、一つ一つ開けてみる事にした。念の為にあの書類は持っている。

一つ目の扉を開ける。

「……………本棚？」

本棚が並ぶ部屋だった。

二つ目の扉を開ける。

「…台所？…埃だらけじゃねーか…」

もう何年も使っていない感じの台所だった。

三つ目の扉を開ける。

「…あいつ地下しか使っていないのか？」

またも埃だらけの部屋。小さな机と、椅子が数個置いてあった。

四つ目。

「わあ、廊下かよ…」

取り合えず閉める。

五つ目。

「……ただのただっ広い部屋か？」

かなり大きな部屋だ。しかし調度品は何もない。ここも埃が積もっていた。

その次はもう、回廊を出る扉だったので、先程の廊下へ続く扉へ戻る。興味本位で廊下を進んでみる事にしたが、若干不安に思っ
て扉は大きく開け放しておく。

廊下は必要性を疑うくらい短く、すぐに突き当たりの扉に行き当たった。

「また扉……」

ちらりと入ってきた扉を確認する。開いているのをしっかり見ると、目の前の扉の取っ手に手をかけた。

「っ!？」

まるで触れたのが分かったかの様に扉がひとりでに開いた。音もなく。開ききるとぴたりと止まった。扉から見える部屋は、いたって普通に見える。

「……………」

もう一度、最初の扉を確認した。

「……………どうするかな……」

ここを止めたとして、あの地下へ戻ってもする事がない。かと言って先程の道筋にある部屋は埃だらけ。もう日も暮れるだろうから、回廊の外へ出て兵士に不審がられるだろう。よって。

「行くか。暇だし。」

フィフィは未知の扉からの誘いを受け入れた。

部屋は大きめで、壁には大きな絵が沢山飾られていた。どれも風景画のようだが、あいにくフィフィは芸術に興味はない。部屋を見回すと、奥へ続くアーチがあった。扉はついておらず、閉じ込められる心配も無さそうだ。アーチから覗くと、そこはこぢんまりとした部屋であり、大きな扉の様な窓と、大きめの寝台が置かれていた。他には何もない。

窓へ寄って扉を開けた。

「……へえ……」

視界いっぱいに広がるのは宵の空。藍色の空の下、地平線の際は暁色と水色の空がまだ残っている。そこだけ見ているとまだ明るさを感じるが、天を見上げればもう星が瞬いている。フィフィはこの、不思議な宵の空が大好きだった。

「良い場所だな……」

思わず頬が緩む。窓の外は十分な広さに張り出しており、フィフィはそこから下の様子を確認した。この部屋の外はどうやら中庭になっっているようだ。今も見周りの兵士が見えた。

「……気に入った！文句言われる迄はここに居座ってやる！」

満面の笑みで一人頷き、良く整えられた寝台へ倒れ込む。寝台はフィフィを優しく受け止め、やがてその重さを受け入れる。

「あー……すっげえ良い気持ち……」

目を閉じれば仄かに……植物だろうか。良い香りがする。手探りで自身の装備を確認した後、フィフィは速やかに睡魔に身を委ねたのだった。

その頃、またも城内を小さな子供が走っていた。しかしこの時のユンファの表情はとても慌てていた。行き交う大人達も少し心配そうだ。ユンファとすれ違ったりディオスは、たった今自分の主から聞いた事を思い出し、密かに溜め息をついた。

「まったく：我が主は物好きだな：」

“しるべ” よ！主のもとへしもべをいぎなえ！

慌てて人物画に叫ぶと、絵の人物も少し心配そうに手を差し出し、道を通した。ユンファは道から走り出て主を探す。

「ニルさま！たいへんです！」

さっと見渡すが主の姿は見えない。とっくに主の就寝時間だと気付き、それでもたった今聞いた事を伝えなければと思い、ユンファは寢室の扉に駆け寄ってそっと叩く。

「ニルさま：おやすみしてるのにごめんなさい。どうかおきてください：」

継る様な声に反応したのか、又はまだ眠りが浅かったのか、ニルはすぐに扉を開けてくれた。昼間は結わえている髪を下ろしていて、そうするとまるで女神のように見えた。

「：ユン：どうかしたの？ 転ばなかった？」

ふわりと顔を包まれて思わずうっとりしそうになるが、ユンファは一生懸命気を引き締めた。

「はい！大丈夫でした。それよりニルさま、たいへんです！」

幼い助手の切迫ぶりに、ニルは微笑みそうになるのを我慢する。

「一体何？ 落ち着いて話してごらんなさい？」

「は、はい：」

言われた通り、ユンファは落ち着きを取り戻す為に深く呼吸をした。

「：たった今へいからの使いが来て：明日のごご、アスさまのじよしゅをしんさする“ごぜんじあい”をするそうなんです！」

（：そうきたのね：）

ニルは思わず舌打ちする。

（即刻解雇出来ないからって、もっともらしい理由を付けたのだわ：）

驚きと同時に怒りも湧いてくる。

（アシユリーの我が俣に悪のりしてるんだわ、あの方は…！）

「ニルさま…」

はっと我に返るとユンファが怯えた顔で見ている。

「あ…ごめんね…ユン。貴女に怒っているんじゃないのよ？」

そう言っただけ抱きしめると、幼い手が縋り付いてくる。

「ちよつと…アシユリーにお仕置きしてやらないとね…」

物騒な言葉にユンファは慌てて主を見上げる。

「お、おしおきですか？」

「ええ、そうよ。あの馬鹿にはお仕置きというものが必要なのよ。

誰もが甘やかすものだから、ああいうひねくれた性格になるのだわ

…」

言いながら小さな頭を抱しめる。その時のニルの目がちっとも笑っていなかったのを、ユンファは見る事が出来なかった。

そんな事も知らず、フィフィは朝の眩しい光に目を覚ました。

「…まぶし…」

ぼそりと呟いて布団の中に潜り込む。そうすると完全に日の光が入らないので、安眠出来ると言うものだ。実に心地良い眠り。フィフィは満足そうに溜め息を吐くと、再び睡魔の誘いに応じた。

そんなフィフィが見当たらない事を、アシユリーは喜んでいた。

（宣告は必須だけど…御前試合までに見つかれば問題無し。慌てふためいてボロ負けしてくれば文句無しだ！）

上出来、と呟いてうきうきと書類を進める。大魔術師といえど、仕事は魔術での応戦だけではない。国中の魔術に関わる問題と向き合わなくてはならないのだ。ペンを持つ手元にはウェスペルがいて、

楽しそうに書類と主を見比べていた。が。

「!？」

急に部屋の温度が下がったような気がして、アシュリーは慌てて部屋を見渡した。

「あっ…」

あるものを見つけ、途端に青ざめるアシュリー。ウェスペルまでもがさっと耳飾りに逃げ込み、震えている。

「な…なに…？」

必死に平静を装おうとするアシュリー。だがそれも氷の女神には通用しない。

「一体どういうつもりなの？」

腕組みをして冷気を発するのはニル。穏やかな口調がさらに冷気を呼んでいる。そんな威圧感に、アシュリーの虚勢はあっと言う間にひびが入った。

「ど、どういうって、何が？」

目を見れず、しかしかろうじて椅子から立ち上がる。

「シラを切るつもり？ 貴方が彼女にしようとしている仕打ちよ。」

「仕打ちなんて…必要な事だろ？」

そんなに必要だとは思っていないのが、目を合わせず縮こまっている事でバレバレだ。

「助手がどうして御前試合をしなくてはいけないの？ それも、負けたら即刻クビだなんて…」

「俺の助手が、ただのぼんくらじゃ困る。足手まといになるだけだし、迷惑なだけだ。そうだろ？」

「あら、じゃあ彼女が勝ったら助手は決定ってわけね？」

「そんなの、勝てるわけない。」

「……へえ？」

しまった、とアシュリーは口を覆ったがもう遅い。ニルの目はひととアシュリーを見据え、ちっけな罪悪感にぐさりと深く突き刺さった。

「勝てないって決まってるわけね。それをあの方に唆したわけ！」
そう言われ、アシュリーは必死に言い返した。

「ニルが言ったんじゃないか！ 技術を補うだろうって。だからそれぐらいの実力がなきゃ、絶対に認めないからな！」

意外な事にニルは反論しなかった。だが、次にした深呼吸がアシュリーの不安を煽る。

そして。

「……………分かったわ……」

低く唸る様な台詞。思わずごくりと唾を飲む。

ニルの抑えた態度に膨れ上がる不安。だが、それが分からない焦燥。

アシュリーは知らず、ニルを不安げに見つめていた。それを受け止めたニルが不敵な笑みを浮かべる。

「…今更そんな顔をしたって駄目。」

むっとして反論しようとしたが、先程とは違うニルの微笑に凍り付いた。

「節度が分からない悪い人には“お仕置き”よ。アシュリー」

?? 過去この言葉を聞いて、いい思い出になった試しがない。

ニルは凍り付いたアシュリーに一瞥をくれると、転移方陣を使わず、地下からの階段をずんずん昇って行った。

フィフィは心地良い微睡みの中にいた。ふかふかの寝台に、ふわふわの布団。静かな空間。

しかしそんな空間に何かが侵入してきたのを感じて、若干不機嫌になる。

（一体なんだよ？）

そう思っただけで、特に警戒はしなかった。

「起きなさい。フィアニス！」

（ん？）

凜とした強い口調。フィフィは僅かに瞼を持ち上げたものの、暗闇が現実へ向かう事を拒む。

（まあいっか。）

そんなフィフィに、女神の逆鱗が落ちたのは言う間でもない。

「起きろと言ってるのよ！」

「うわああっ！！？」

布団をはぎ取られただけならまだしも、身も凍るような冷気が一気に襲いかかってきたのだ。

「なっ……！？」

驚きに目を白黒させるフィフィに、ニルは容赦なく言い放った。

「午後から貴方は御前試合をしなければならぬわ。そして勝たなければ駄目よ。」

「……………はい？」

「返事は“はい”よ。何が何でも勝つのよ。もしくは方々に実力を認めさせなさい。いいわね。」

「待って下さい！なんの話ですか？」

「御前試合と言った筈よ？わたしが手を貸します。だから、勝ちなさい。」

「勝つって…あー、御前試合？って、俺が勝てるようなもんなんですか？」

一瞬止まった。

「…だから手を貸すと言っているのよ。」

「ほんと待って下さい。大体何の為に？」

嫌な予感がする。

「貴方の主の我が侘よ。後はそれを面白がっている方々の要求よ。」

「俺は恰好の暇つぶしですか。」

「自覚したなら良い事だわ。もう時間がないの。さっそくわたしの回廊へ来なさい。」

「いやいやいや！俺はしませんよ！？要するにたかがギルドの賞金稼ぎじゃ勝てない試合なんですよね？」

そう言ったフィフィに、ニルは真剣な面持ちで近付いた。そして、ゆっくりと言葉を発する。

「……いい？これはもう、決定事項なの。勝つ覚悟を決めなさい。勝てなければ貴方は…即刻クビよ。」

「……………は？」

「さ、行くわよ。」

「は！？」

「…アシュリー…ウィルレイユの力場において、我、ニルヴァ？ナ…ハディエスが道を紡ぐ。我は主の友なりて、誓いを共にするものなり。その誓約において我が力を許し給え？？」

歌う様な魔術の声音。それに誘われて視界は揺らいでいく。

事をしっかりと噛み砕いている暇もなく、フィフィは強制的に移動させられたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0876y/>

大魔術師と助手

2011年11月4日13時03分発行